



### 立春の卵

副校長 岩間 洋

校庭の梅の花が開花し、その香りを漂わせる候となりました。桜の枝のつぼみもふくらみ、春の到来を待ち望んでいます。厳しい寒さの中にも、日一日と春の訪れが感じられる時期になりました。

この時期、常緑樹以外の木々は葉を落とし、校内の風景は鮮やかさに欠けますが、よく見ると桜の木やアジサイの植え込みには小さいつぼみがついていることに気が付きます。

このつぼみは冬芽(とうが)といい、冬を越して春に花となる花芽(かが)と葉になる葉芽(ようが)に分けられます。この芽は夏の終わり頃からつくられ、冬の前に冬芽となります。硬いつぼみは冬の寒さや乾燥から身を守り、さらに冬芽の内側では春に美しい花を咲かせるためにゆっくりと準備している姿が伺えます。冬芽は冬の寒さが厳しいほど勢いよく芽吹き、大きく成長するといわれています。冬の寒さに耐え、着々と春の準備をする冬芽のように、本校の子供たちも厳しさや困難に負けなたくましさや粘り強さを身に付けられるよう支援していきたいと思います。

2月に入ると3日が節分、4日が立春と暦の上では春を迎えます。中国で、「立春の日には卵が立つ」ということが書かれていた古い書物が発見され、今から70年ほど前にこの話を聞いた人々が、立春の日には卵を立てることを試みました。

すると、立つはずがないと考えられていた卵が立ったのです。この不思議な現象に当時の人々は驚き、「なぜ卵が立つのだろう。」「立春とどう関わりがあるのだろう。」「太陽と関係があるのか。」などといろいろな意見が出ました。

その後、当時の物理学者であり、随筆家でもあった中谷宇吉郎博士は「立春の卵」という随筆を著しました。その著書の中で「卵は立春に限らず、いつでも立てることができる。新鮮な卵の表面にある3点以上の出っ張りを足として卵を支え、卵の重心をそこに落とすべく、少しだけ根気強く作業すれば生卵であっても、ゆで卵であっても立つのである。」と書いています。

それまでずっと卵が立たなかったのは「卵は立たないもの」と誰もが思い込んでいたからであり、立たないと思っていたから誰も挑戦しようとは思わなかったからです。

数年前にベストセラー本となり、さらに有村 架純さんの主演で映画化され、話題を呼んだ「ビリギャル」(学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話)の中でも、卵を立てるシーンが出てきました。(クララの卵)

成績が伸びず落ち込んでいる主人公の高校生に対して、塾の講師が卵を立てるところを見せ、「可能性があるということを知っておくことってすごく大事なんだ。」と励まし、自信を無くして慶応大学進学への夢をあきらめかけていた主人公に再び意欲を取り戻させるシーンでした。

物事、最初から「無理だ」「できない」とあきらめてしまえば何も解決しないし、何かをやり遂げることはできません。まずやってみること、挑戦することの大切さを改めて教えられる話です。

本校の子供たちが何事にも前向きにチャレンジし、何かができるようになったり、苦手を克服したりすることを通して自信を深め、さらに大きく成長することを願っています。